Osaka University Knowledge Archive

Title	形象・意味・解釈 : G・ベームにおける絵画経験の諸相
Author(s)	廣兼, 順子
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42006
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【12】

氏　　名	廣　兼　順　子（ひろ かね じゅん こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　15105　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学　位　論　文　名	**形象・意味・解釈** **－G・ベームにおける絵画経験の諸相－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　神林　恒道 （副査） 教　授　上倉　庸敬　　教　授　鷲田　清一　　助教授　藤田　治彦 助教授　圀府寺　司

論文内容の要旨

本論文は「書物の時代」に代わる、新たな「イコンの時代」の到来の予感と、この「イコン的転回」に即応する「イコン」すなわち「形象」の論理学の可能性を考察しようとしたものである。論者はゴットフリート・ベームの形象理論を軸として、まず形象の意味から説き起こし、さらにその芸術学的解釈へと問題を展開している。本論は全体で三部構成からなっている。

第一部「眼と形象」では、従来絵画の分析についてなされてきた「内容」と「形式」の二分法が批判される。形象の解釈は、これに先立つ未分化の視覚に基づく絵画経験から始められなければならない。絵画をその内在的視点から自律的に考察しようとした論考として、フィードラーの芸術論がある。論者はこの芸術創造の理論を、ブプナーのカント解釈を手がかりに観照の理論へと再解釈を試みる。そのヒントとなったのが、ベームの形象理論である。

第二部「意味への飛躍」では、第一部で明らかにされた「眼の理論」を、ルネサンスの集中遠近法から二十世紀の抽象絵画にいたるまで幅広く検証し、形象の持つ弁証法的な性格をあとづけようと試みる。そして形象が物質的なものを越えて意味を志向するプロセスのうちに、新たな絵画の解釈学の可能性が開かれる。その論理を支えているのが、ガダマーの解釈学とイムダールのイコニークの理論であり、そしてこの両者の理論を媒介しているのがベームの形象理論である。この絵画の解釈学はさらに形象の対象性と絵画作品の構造をめぐって、N・ハルトマンあるいはインガルデンの美学の批判的考察へと発展する。

第三部「形象・時間・言語」では、ベームの絵画の解釈学の核心をなしている時間論について綿密な吟味がなされている。論者はここで、形象の経験に内在する継起性と同時性という時間の問題を、ソシュールの言語の意味生成とのアナロジー、あるいはイーザーの読書論と比較することを通じて、形象と言語の関係の総合的な考察にまで論を進めている。

論文審査の結果の要旨

純粋視覚の理論は「美術理論における近代」という問題をもっとも端的に特徴づけるものだと言ってもよいであろう。リーグルあるいはフィードラーに始まり、現代のグリーンバーグに至る流れは、しばしば没精神的な即物的フォー

マリズムという誹りを受けてきた。本研究の軸を形成しているベームの形象理論は、絵画作品が成立する原体験、つまり「形象の経験としての絵画経験」そのものに目を向けることにより、「眼の論理」を本来の意味で生命化しようとしたものである。これは悟性と等価な感性の論理の主張であり、かつての理性中心主義に対する批判でもある。

本研究についてまず評価されねばならないのは、ベームをひとつの座標として捉えることによって、美術史あるいは美術批評におけるフォーマリズムの意義を、歴史的文脈において明らかにしたことである。論者はベームの形象理論を追いかけているだけでは決してない。反転してベームの理論そのものを、解釈学的美学、コンスタンツ学派の受容美学の動きとからめつつ、現代の芸術思想の流れのうちに批判的に位置づけることに成功している。さまざまなメディアを通じてイメージが氾濫している現代にありながら、形象そのものの意味を問おうとする研究はあまりにも少ない。その多くは形象を単にヴィジュアルな意味の記号として解読しようとする、カルチュラル・スタディ的な試みに留まっている。その状況のなかで、論者はあえて芸術学の原点に立ち返って、再び芸術とは何かを問い直そうとしている。この研究の姿勢は高く評価されてよいであろう。ベームの論考はこれまでも部分的に紹介されてはきたが、本研究によってその全貌がはじめて明らかとなった。この基礎研究をもとに、芸術学研究のすそ野がさらに広がることが期待できる。その業績は決して小さいものではない。

だが部分的に問題とすべき点がないわけではない。性急に論を進めるあまり、概念や用語の使用に際していささか正確さに欠けるところが見受けられる。また第三部で、形象の意味生成と言語の意味生成を比較することから、一歩踏み込んで読書行為の理論をモデルに見ること、読むこと、語ることの連関を総合的に考察しようとするが、この試みは意欲的ではあるが、なお示唆的な段階に留まっていると言わざるをえない。

しかし先に述べた成果は、これらの不備な点を補って余りあるものであると言うことができる。よって本審査委員会は一致して、ここに本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。